

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

34： 人生をかける価値があるか？

千葉 晃央

仕事を辞めたいと思ったことは？

「仕事を辞めたいと思ったことはありませんか？」と学生に聴かれることがある。それは誰でも一度は思ったことがあるだろう。私の場合、そのきっかけは自分の仕事のできなさ具合である。利用者さんや、他のスタッフの方と、適切にコミュニケーションをとることができなかつたり、ご家族からいただいた大切なご意見であったり、職場の改善がうまくいかなかつたり…である。全て私に起因する。逃げ出したくなるぐらい悔しい思いだった。そういう思いはしたくないので、学びたいと思い、気になる研修はできる限り出るようになった。この分野の知見には、常に触れ続けるよう行動をしてきた。東京での研修をはじめ、学会や気になる勉強会があれば遠方でも参加した。

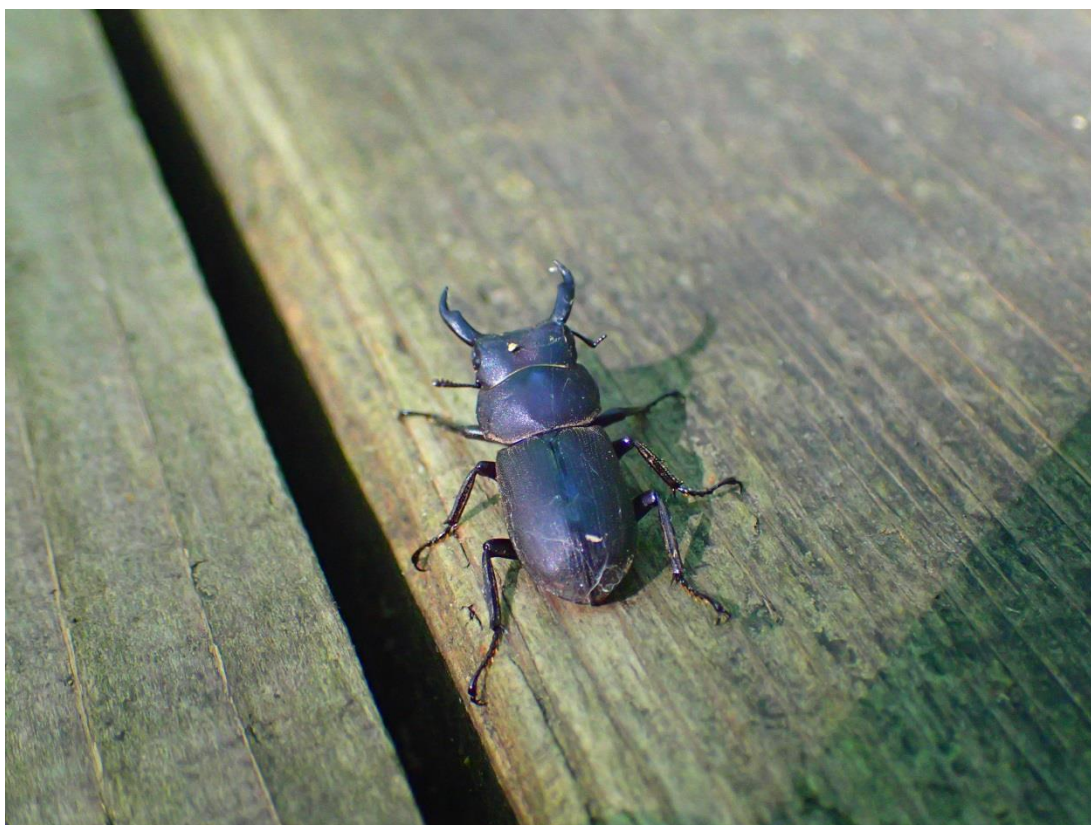
力不足の補い方

自分の力不足。それを補うためには研修参加だけでは不足だった。個別スーパーヴィジョンも継続的に受ける機会を持った。その流れが、今も私の複数の活動につなが

っている。その後、進学、そして事例検討会など複数の研修会を主催した。自分が気になることは他の人も気になるはずと、一人で学ぶのはもったいないと、同じ思いの方々と一緒に勉強をしていった。そこでは近接領域や、同業種の方にたくさんお目にかかった。その中で、自分の仕事の質や、他の職場の状況を知り、自分自身の仕事への評価、職場への評価を更新していった。相対化の作業であった。自分たちの仕事がこの業界のどのぐらいの位置になるのか、自分たちの職場の強みはどこにあるのか、またのびしろはどこにあるのか、そんなことが明確になっていった。こうして自分を新規更新し続けていないと利用者さんの利益は守ることができないと感じていた。

障害者問題の克服に挑む！

私はたぶんこの仕事に魅了されているのだろう。仕上がった仕事の質を通じて、障害を持った方々がきちんと評価される。それこそが、障害者問題の克服である。そのために自分が力になれることがあれば、惜しみなく組みたい。



障害を持つ方々が支援している！

自分自身がこの世に生まれてきて、意味があるように生きたい。そう感じた10代の頃があった。現在、この仕事について、約25年。やりがいがあるから継続ができています。社会的弱者、社会的不利を解消する戦いに身を置いている。そんな闘争心を持っている。また持たないと、この仕事は務まらない。

歴史を振り返っても、障害者問題は戦いの歴史である。当事者や、当事者をサポートをする人々が表に出て、戦って、批判も受けながら、現在を獲得してきたのである。

私の現場は、目の前の仕事を、納期を守り、品質を守り仕上げる。その仕事の質に対して、企業が認めて、期待をし、仕事の依頼を受ける。

障害を持っている人は支援を受ける存在であって、世の中に貢献できることはない?!それはとんでもない!勘違いです!その証明に身を置いているのである。

利用者さん、そのご家族さんは「障害」という言葉だけで、他者から「できない」とみられる経験をしている。そういった社会から疎外された経験がたくさん存在する。これを乗り越え、相手に認めざるを得ない事実を積み重ねていくのである。しかも淡々と。社会に「あなたたちにぜひやってほしい」そう思われなければならない。注文をもらい、応える。通常の経済活動に参加する。それこそが社会参加であり、経済活動への参加であり、自立生活の一端である。

どんな意義があるのか？それが見えていないといけない。

いないと成り立たない事実

障害者の就労という領域では成果が上がっている業種の一つは、リサイクルや清掃業務といった環境にまつわる仕事である。公園の清掃、マンションのメンテナンス、廃棄物のリサイクル事業などが挙げられる。これはさらに環境問題との闘いという側面もプラスする。さらに人生をかけて挑む価値がある課題ではないかと感じている。そのためには利用者とともに職員も汗をかいで働く。

こうした社会事業的側面も知的障害者の労働現場には含まれている。利用者さんができなかったことができるようになるというだけではない。その理解だけでは不足といえる。社会において何をしているのか？

少しの環境さえ整えば

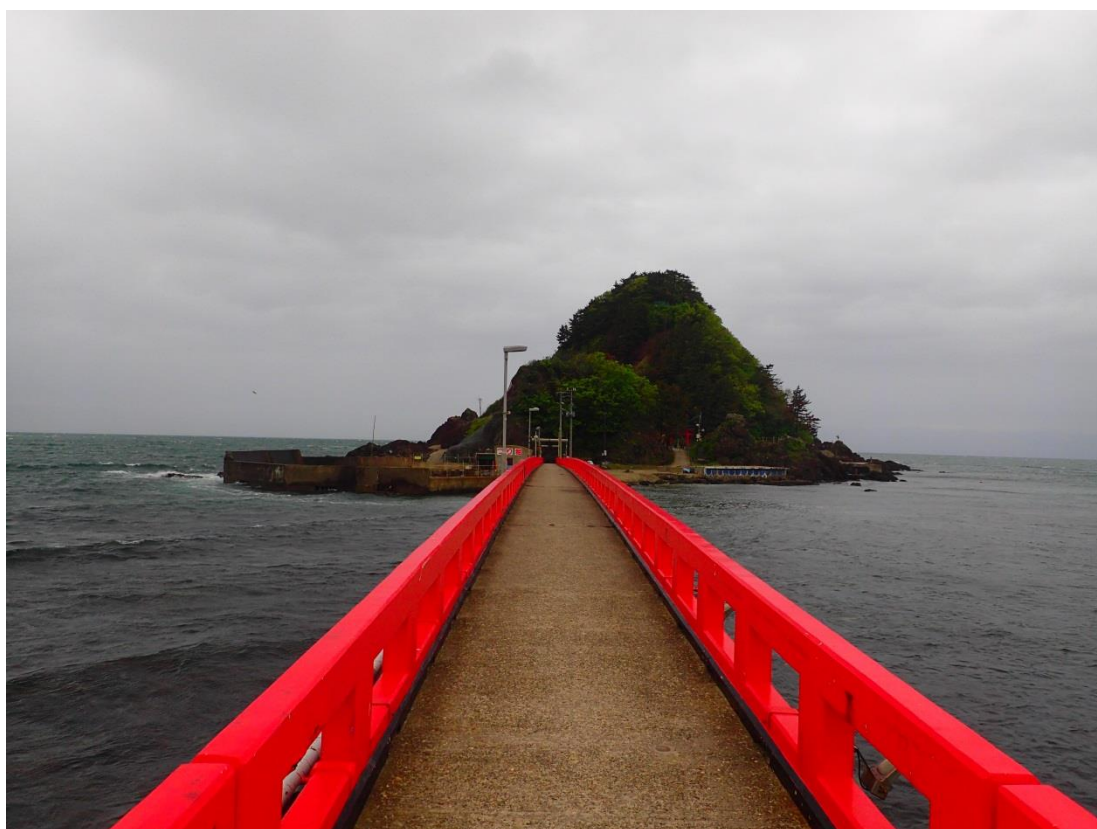
実感として、少しの環境さえ整えば、働くことができる人がたくさんいると感じている。働けない人はいない。この証明に挑む。人は誰でも、誰かの役に立ちたいと感じてる。「ありがとう」と思ってもらいたい。

「ありがとう」と言ってもらいたい。「また、頼むね！」といわれたい。「あてにされたい」

「頼りにされたい」。それこそが生きるよろこびであり、明日を迎えるのぞみである。

価値のない人間なんて誰もいない。少しの創造的な工夫さえあれば、それを社会に突き付けることができる。

創造的な工夫！それが職員には求められ



ている。この連載ではその創造的な工夫を取り上げて書いてきた。

障害者雇用水増しは最悪なメッセージ

中央省庁での障害者雇用の水増しがひどい。これは何を示しているかわかるだろう。国は障害者は「働けない」と思っている。働いてもらうつもりはもともとない。働けなくて当たり前。そういう手間はかけられない。国のお墨付きで障害者は働けない！といているようなものである。働く価値がないといているのである。人を馬鹿にしている。ますます、この戦いはやりがいがあるし、人生をかける意味があるように強く感じている。

BACK ISSUES

業務の適正化はできるのか？33 2018年6月

安全衛生委員会 32 2018年3月

施設というコミュニティ 31 2017年12月

職場づくり 30 2017年9月

健康管理 29 2017年6月

音 28 2017年3月

救世主になりたい援助職 27 2016年12月

事件について 26 2016年9月

クルマ社会と福祉政策 25 2016年6月

施設が求める「障害者像」はあるのか？ 24

2016年3月

連絡帳 23 2015年12月

におい 22 2015年9月

作業着 21 2015年6月

食べる 20 2015年3月

通勤 19 2014年12月

クスリの作用、人の作用 18 2014年9月

倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月

触れる 16 2014年3月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」 2014年3月

情報の格差 15 2013年12月

20年前のノートから 14 2013年9月

そうじのねらい 13 2013年6月

個別化の暗部 12 2013年3月

グループワークの視点 11 2012年12月

実習生がやってきた！ 10 2012年9月

月曜日のせいやな 9 2012年6月

所得を決める福祉職？8 2012年3月

世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月

この現場へのたどり着き方 6 2011年9月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011年9月

旅行がない！ 5 2011年6月

職員の脳内回路 4 2011年3月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010年12月

利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月

障害者自立支援法で不景気に！？ 1 2010年6月